



# 上向台小だより

6月号  
西東京市立上向台小学校  
令和3年6月1日

<http://www.nishitokyo.ed.jp/e-kamimukoudai>

## 人権感覚に磨きをかける～全ての児童に「さん」を付けて～

副校長 三田 大樹

校庭の木々の緑が色濃くなるように、子どもたちもクラスの友達や担任との関わりを深めています。緊急事態宣言の延長に伴い、フレンド班（異学年交流班）による全校オリエンテーリングは延期になりましたが、タブレットの使い方を教えたり、飼育小屋のお世話を引き継いだり、2年生が1年生に学校案内したりするなど、学年を超えた「かかわり」はコロナ禍でも健在です。

さて、4月の保護者会でも校長から申し上げた通り、本校では、かかわりやつながりの中で、「思いやりのある児童の育成」を重点に掲げています。そのためには、教職員自らが思いやりのある言葉と態度で児童に接することは言うまでもありません。

例えば、1年生から6年生の全ての児童に「さん」を付けて呼ぶことも、具体的な取組の一つです。これまでの児童とのかかわりの中で、敬称を付けなかったり、男子児童に対して「くん」付けて呼んだりするなど、児童自身も「さん」を付けて呼ばれることに照れくささや抵抗があるかもしれません。しかし、一人一人の児童はかけがえのない存在であり人格を尊重するという趣旨から名前を呼ぶときはあだ名や呼び捨てにせず、敬称を付けて呼ぶことが大切であるという共通認識のもと取り組んでいます。

また、こうした取組の背景には、2018年10月に西東京市が今と未来を生きるすべての子どもが健やかに育つ環境を整えるために策定した「西東京市子ども条例」があります。前文には、次のようなことが書かれています。

### 【西東京市子ども条例（前文）より】

「わたしたちは、子どもが失敗や間違いをしてもやり直し、成長できるまちにしていきます。」

「子どもは、一人ひとりの違いが認められ、自分らしく育つことができます。」

「おとなは、子どもが安心して自分の思いや考えを十分に伝えられるよう、子どもと向き合って意見を聴きます。」など

単に児童の名前を「さん」を付けて呼べばよいという表面的なことではありません。児童が安心して自分の思いや考えを伝えられるように、教師は児童の意見を軽視したり、無視したりするのではなく、意見をもつに至るまでの考え方や状況に配慮し、きちんと受け止め丁寧に聴くことが大切です。

こうした教職員の言葉かけや振る舞いの一つ一つが温かで前向きな学級風土や学校文化を創り出し、思いやりのある児童をはぐくむことにつながっていくと考えています。

2学期以降の土曜公開や体育発表会等でご来校される際には、人権意識の高い教職員の姿と、共に高め合い助け合う思いやりに溢れた児童の姿をご覧いただけるはずです。

6月も引き続き緊張感と制限の中での教育活動となりますが、新たな発想で「かかわり」や「つながり」の機会を保障するとともに、私たち教職員一人一人の人権感覚に一層磨きをかけてまいります。ご家庭によって様々お考えもあることと思いますが、何卒、ご理解・ご協力の程よろしくお願い申し上げます。